

東方波導伝

宵闇の魔神ゼノン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

波導を用いて戦う姿から「波導の勇者」と呼ばれている『波導ポケモン』ルカリオは、ユキメノコが守護する氷山の頂上で修行の日々を送っていた。そんな二人のもとに一人の胡散臭い妖怪（これだけで誰かわかるよね？）が現れる。

妖怪は二人に提案する。

「幻想郷に来ませんか？」

戸惑いながらもその提案に乗った二人は、人と妖怪が共存し、神さえも存在する世界
??? 幻想郷にやってくる。

だが、それと同時に世界の崩壊も開始し始める
?????????

*ポケットモンスターと東方projectのオーバークロス小説です。
その小説の作者はへたくそですが、もしも読んでくださる心の深い方は、温かい目で
読んでくだされば幸いです。

目次

波導の勇者とスキマ妖怪

—
1

波導の勇者とスキマ妖怪

波導??それはとある世界で一部の生物だけが使えるもの。

波導とは生命力。その生命力を使用して戦う生物が存在する。

その生物は『波導^{はとう}ポケモン』ルカリオ。

彼は今氷山の頂上で瞼を閉じ己の精神を集中させていた。

だが――

「ねええ！ ひ――ま――だ――！」

「うるっさいわ！ ユキメノコ！」

小さな雪女の姿をした『雪国^{ゆきくに}ポケモン』ユキメノコに毎日邪魔されている。

ルカリオは腕組を解くと、頂上にある氷の棘から降りる。

溜息を吐くルカリオにユキメノコはぶくうーと頬を膨らませる。

「だって暇なんだもん！」

ユキメノコは見た目が大人びているのだが、頭の中は少々子供っぽいところがある。

この氷山では守護者として暮らしている彼女はクールな雪女なのだが、この氷山を襲撃するような輩はなかなかいないため、ユキメノコはいつも暇なのだ。

ルカリオがたまたまこの氷山を就業としてくるようになってから、より一層この氷山を襲撃する者はいない。

波導の勇者がいる氷山なんか襲撃したら命がいくつあっても足りないかもしれない

が。

そのルカリオはユキメノコのほうを見る。

いきなり目線があつたユキメノコは急だったためにドキツとして顔が赤くなる。

ユキメノコは何かを期待しているのか、静かに目を閉じる。

波導弾

はどうだん

だが、そんなユキメノコを無視してユキメノコの後ろに向かつてルカリオが波導弾を放つ。

「痛い！」

風と共にユキメノコの顔を波導弾が通り過ぎる。そして、少女の悲鳴。

「えっ???
???'」

「よかったな。どうやら襲撃者のようだ」

突然のことにいまいち理解できていないユキメノコに、ルカリオが軽く笑みを浮かべる。

慌てたように後ろを振り向いた先には、頭から煙を放つ金髪の女がいた。

「いきなり攻撃するなんて少し野蠻やばんなんじゃないかしら?」

腰まで届く長くきれいな金髪、髪と同じく金の瞳、道士服のような紫色の前掛けにフリルのついた白いドレス、両手は白い手袋、雨も降っていないのに日傘をさし、口元を扇子で隠している。

ハッキリ言って胡散臭い。

ルカリオは警戒しながらユキメノコを後ろに隠すように庇う。

「伝説でしか聞いたこともなかったが、まさか人間がここに来るなんてな。それも、異世界の住人が???いや」

そう言った後、何かを感じたのか、ルカリオは少女に向かって波導を纏わせた右手を出す。

「名を聞かせてもらおう???あやかし妖よ」

「あら、初見で見破られたのは初めてね。まあ、いいわ。名乗りましょうか、私の名前は八雲紫。この世に唯一のスキマ妖怪よ」

「スキマというのが何なのか知らんが、それはいい。俺はルカリオ。波導の勇者と呼ばれている」

紫が名乗った後、ルカリオも名乗る。

それを見て面白くないのか、ユキメノコも会話に加わる。未だルカリオの後ろで。

「私はこの氷山の主、ユキメノコよ」

紫はそれにうなずくだけで済ませると、二人にある提案をする。

「お二人方??? 幻想郷に来ませんか？」

この提案に二人はというと???

「はあ。」

頭の中がハテナになった。